



『飲んで大丈夫? やめて大丈夫?』 妊娠・授乳と薬の知識』

評者・山根 美和 柴田産婦人科医院

有益投与とは「治療上の有益性が危険性を上回るときのみ投与する」という意味である。薬は有益な作用を期待して使用するが、どんなに有益であっても、副作用や危険性が高い薬剤は使用する際十分に注意しなければならない。妊娠・授乳中ならなおさらである。

「妊娠とわかる前に薬を飲んでしまったのですが大丈夫ですか?」「授乳中ですが薬を飲んでも大丈夫ですか?」産婦人科に勤めていれば、かなりよく聞かれる質問である。質問を受けて、内服した(これから内服する)という薬を添付文書で調べると、“有益投与”という内容の説明がほとんどで、決して「妊娠・授乳中も安心して内服できる」などという文は出てこない。そこで患者さんへは有益投与であることを伝えるのだが、対応の仕方によっては、不安を大きくしてしまう。

この本はそんな妊娠・授乳中の薬の使用・解釈・説明について、国立成育医療研究センター母性内科・村島温子氏と同看護部・山内愛氏を編者に、わかりやすくまとめられている。2008年4月から1年間『助産雑誌』に連載された時から私はぜひ別冊にまとめてほしいと思っており、待望の書籍化である。

妊娠期の安易な薬剤投与は避けるべきだが、母体の体調不良は胎児にとってもよくない環境であり、必要であるにもかかわらず投与しない

妊娠中によくある症状や 疾患別の対応を解説



村島 温子・山内 愛 編著
定価 2100 円(本体 2000 円+税 5%)
A 6 判/医学書院/2010 年

で不利益を被ることがある。本書では、「先天奇形の自然発生率を薬剤投与により有意に上昇させるかどうか」という考えをベースに総論と各論が展開される。総論では薬剤使用の基本事項である All or None の時期、安全性への評価・臨床への応用、授乳中の使用に関する基本的な考え方と基本事項の確認ができる。各論では、妊娠中によくある症状や疾患別に事例をあげて Q&A 形式で書かれており、患者さんにどのように対応すればよいかが紹介されている。

また、本書の特色は随所にケアのポイントが紹介されている

点である。薬への不安は子どもへの影響を懸念する母親の気持ちの表れであり、その気持ちを無視してケアはできないこと。妊娠中・授乳中に、より健康的で不安なく過ごしていけるような、気持ちに寄り添ったケアが大切であること。薬の副作用も大切だが、母親の心配する気持ちがどこから来るものなのか、薬に対する不安感などを理解して仕事を続けていかなければと改めて感じられる 1 冊である。

本書は、産婦人科に勤務する人には必読の本だ。この本をきっかけに薬についての知識を増やし、新たな情報を収集し日常の勤務に役立ててほしい。そして何よりも、薬で悩んでいる人には相談機関がある!ということをぜひ伝えてほしい。